

Document Citation

Title	War and peace
Author(s)	
Source	<i>Publisher name not available</i>
Date	
Type	distributor materials
Language	English
Pagination	
No. of Pages	8
Subjects	
Film Subjects	War and peace, Vidor, King, 1956

LEO TOLSTOY'S

War

and

Peace



俳優についても、三人の主役のほかに重要な役が二十いくつもあり、それぞれとくしゆのタイプを必要としたので、アメリカ、イギリス、イタリア、オーストリア、スウェーデンの各国からえらんで国際的キャストが組まれた。戦場の場面にはイタリア軍隊から一八、〇〇〇人の兵士と六、〇〇〇頭の軍馬が借りられ、ある場面では五マイルにわたつて戦場が行われていたのが見られる。

以上は製作にかかるまでの準備の一端をしるしたもので、このほかにも一八〇〇年代のはじめのロシアの風習についての専門家や歴史学者、ナポレオン研究者、トルストイ研究者をあつめての考証の仕事などもあり、たとえていえば十本の大作に同時にとりかかつたようなものであつた。

しかし、このような辛苦と努力があつてこそ、映画事業六十年の夢が実現したのであつた。デ・ロレンティスとパラマウントの名を映画史に永遠にのこすべき七、〇〇〇、〇〇〇ドル（二十五億二千万円）の巨篇「戦争と平和」はこうして生まれたのである。

★ 解 説 ★

映画がはじまつてから六十年、すべてのプロデューサーがかならず一度は製作したいと夢に抱いていたトルストイの「戦争と平和」がついにパラマウントの手によって映画化された。トルストイの「戦争と平和」はいうまでもなく、世界文学史上、最高最大の名作であり、心あるプロデューサーの食指をそそるのは当然であるが、あまりにも規模が大きく、あまりにも構想が雄大なので、だれも手をつけるものがなかつた。それをパラマウントがついに敢行した。不可能を可能ならしめた偉業と云われなければならぬ。

もちろん、このような大作の製作には慎重な準備がある。企画を検討すること数年、原作を尊重する上からもヨーロッパで製作することがまず考えられ、さいわい、イタリアのポンテイルロレンティス・プロが協力を申し出たので、協同製作の案がまとまり、「ユリシーズ」「苦い米」「南の肌」のプロデューサー、デイノ・デ・ロレンティスが製作を担当することになった。監督には「テキサス決死隊」「摩天楼」の名匠キング・ヴィダーが採用され、「OKネロ」「河の女」をつくつたイタリアの才幹マリオ・ソルターティが第二班の監督になった。シナリオには米・仏・伊の著名のシナリオライターと作家九人を動員、撮影監督は「赤い靴」「アフリカの女王」「裸足の伯爵夫人」のイギリスの名手ジャック・カーディフと「ユリシーズ」「ヨーロッパ一九五一年」「ポー河の水車小屋」のイタリアの老練アルド・トンティ、音楽は「平和に生きる」「道」のニノ・ロータ、美術監督に「ナポリの饗宴」のマリオ・キアリ、衣裳に「ナポリの饗宴」のマリア・デ・マテイス、メイクアップに「蝶々夫人」のアルベルト・デ・ロッシと製作スタッフのすべてに英・米・仏・伊の有能な人材をあつめていく。

主役には「ローマの休日」「麗しのサブリナ」のオードリー・ヘップバーンが待望二年ぶりの出演、「ミスター・ロバートツ」「荒野の決闘」のヘンリー・フォングと「リリー」美しのロザリンドのメル・ファラーの二人の名優を相手にすばらしい三重奏の名演技を見せている。助演俳優陣も多彩をきわめていて、「アンナ」「にがい米」「ラブソディ」のヴィトリオ・ガスマン、「第七のウェール」「黒ばら」「絶壁の彼方へ」のハーバート・ロム、「ママの思い出」「白銀の嶺」のオスカー・ホルムカ、「画家とモデル」「中共脱出」のアニタ・エクバーグ、「ガラスの靴」「楽園に帰る」のバリー・ジョーンズ、「怪僧ラスプーチン」「エディ・フォイ物語」のミリー・ウィターレ、「情事の終り」「ホプソンの婿えらび」のジョン・ミルス、「ミニヴァー夫人」のヘルムート・ダンティン、「ローマの休日」のツリオ・カルミナティ、「貴方は若すぎる」のアンナ・マリア・フェレロと英・米・伊をはじめ、スウェーデン、オーストリアからも適材適所の俳優をあつめている。テクニカラー、ビスタビジョン作品であることはいうまでもないが、上映時間も三時間半に及び「風と共に去りぬ」をはるかにしのぐ映画史上空前の豪華超大作である。



映画史上最高の巨篇

「戦争と平和」が生まれるまで

映画がはじめてこの世に生まれてから、トルストイの「戦争と平和」を映画化することはすべての映画製作者の夢であった。一九二五年以降だけでも、アメリカ、フランス、イタリアの二五人のプロデューサーが「戦争と平和」の映画化を発表して、企画からシナリオにまで手をつけたものもあるが、あまりにも膨大な規模と複雑な内容のために陽の目を見ずに挫折し、少く見ても一〇、〇〇〇、〇〇〇ドル（三十二億六千万円）の準備費が無駄になっていた。

イタリアのプロデューサー、デイノ・デ・ロレンティス（「にがい米」）、「ヨーロッパ一九五一年」の「ユリシーズ」が「戦争と平和」の映画化を思い立つたのは一九四九年のことだ。五年のあいだ着々着想をねっていたが、五年の春、パラマウントの協力を得ることに成功、映画事業五十年の夢が実現することになった。

デ・ロレンティスははじめ、監督にイリア・カザン、主演俳優にジェラルド・フィリップ、マロン・ブランド（ナターシャ役はきめていなかった）その他を予定していたが、パラマウントとの提携が成立するとともに、監督キング・ヴィグダー、主演オードリー・ヘップバーン、ヘンリー・フォンダ、メル・ファーラーという顔ぶれが決定、製作開始は五年八月と定められた。

ところが、デ・ロレンティスの壮挙が外部にもれると、五年一月、デ・ヴィッド・セルズニック（「風と共に去りぬ」のプロデューサー）とトッド・A・システムのマイケル・トッドが同時に「戦争と平和」映画化の企画を発表した。とくに、トッドはロバート・シャープウッドがすでに脚本を執筆中であり、監督もフレッド・ジンネマンに決定したと発表した。デ・ロレンティスも準備を急ぎ、予定をくりあげて五年七月四日から撮影を開始することになった。

その後、セルズニックは企画をとり下げたが、トッドはいまだに締めず、ソ連政府がロシアで撮影することを許可すれば製作したいと云っている。映画製作者にとつて、「戦争と平和」の映画化はそれほど魅力のある仕事なのである。それだけに、この難事業を完成したデ・ロレンティスとパラマウントの功績も大きなものと云わなければならない。

デ・ロレンティスにとつて、最初の難関は一、六〇〇ページの大部をいかに脚色するかということであった。デ・ロレンティスはこの仕事にフランスからジャン・オーランシュ（「禁じられた遊び」）ピエール・ボスト（「禁じられた遊び」）イタリアからマリオ・カメリニ（「ユリシーズ」）エンニオ・デ・コンチニ（「水田地帯」）マンボ・イヴォ・ペリリ（「にがい米」）「明日なき愛情」アメリカからブリジット・ボーランド、ロバート・ウエスタビーの七人のシナリオライターと作家を動員、まず四〇〇ページのストーリーを書きなさせ、それをアメリカの作家アーウィン・ショウ（「愛の嵐」）がさらに三〇〇ページに短縮、これをもとにしてシナリオをつくった。

次の難関はロケイション地の選択であった。「戦争と平和」の舞台は一八〇〇年代のはじめのロシアであるし、アウステルリッツ、ポロディノ、ベレジナの史上に名高い戦闘場面やナポレオンのモスコウからの退却の場面を撮らなければならないからだ。

ロケハンにはフィンランド、ユーゴスラヴィア、スペイン、北部イタリアで行われ、はじめフィンランドが候補地にあげられたが、エキストラの経験者を多ぜい必要とするところから北部イタリアで撮影することにきまつた。

屋内場面はポテンティ・ロレンティス撮影所の四つのスタジオではとてい足りないで、チネチッタ撮影所の三つのスタジオとセントロ・スベリメンタレ撮影所の三つのスタジオを借りて撮影された。

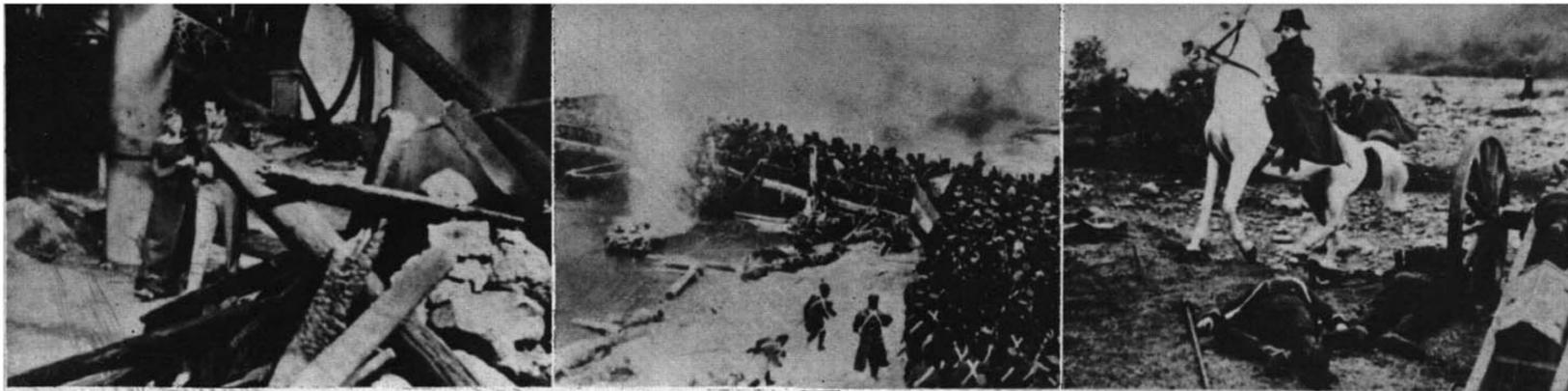
モスコウの市街はローマの郊外に一八二二年のモスコウそのままにつくられた。この市街はナポレオンのモスコウ入城の場面を撮るときに焼きはられた。

これらのセットの費用だけで一、〇〇〇、〇〇〇ドル（三億六千万円）をこえた。

小道具の数と費用も莫大だった。こまかい点まで正確を期したので、美術監督の仕事も大へんだつた。ロシア軍とフランス軍の兵士のために当時のものと同じ軍服が七千着つくられ、ボタンだけでも十万个を要し、スイスのあるボタン会社が昼夜兼行で仕事を二週間かかった。一人の兵士のために要した費用が装備もふくめて二五五ドル、一般市民の服装が六五ドルかかった。フィンランドでつくられた五十台のトロイカが一台三二〇ドル、三十五台の馬車をつくるのに総計一〇、〇〇〇ドルかかった。さまざまな型の二〇〇門の大砲と四、五〇〇挺の銃が専門家の指導のもとに当時のものとおなじにつくられた。

これらの小道具を収容するために大きな倉庫が二棟借りられ、とくべつの裁縫工場と工作工場がつくられた。





駆落の計画はソニヤに感づかれ、ソニヤはビエールに事情を知らせた。ビエールはアナトール家につけて、アナトールを追い出した。しかし、ナターシャはナターシャの心変わりを知って一そう憂鬱な人間になった。休戦の期間がおわつて、戦雲がふたたびたはよめじた。ナポレオンはニーマン河に大軍をあつめ、一挙にロシア軍を粉砕しようとしていた。クツゾフ將軍は建物や作物を焼きはらつて退却、焦土戦術をもつて敵に当らうとした。しかし、ポロティノの近くで、とうとう決戦がきざられないことになつた。

ポロティノはビエールの田舎の邸の近くで、ビエールはナターシャを失つてからここにひきこもつていて、ロシア軍が絶えずに近づいて退却するのを目の前面に見た。兵卒がばたばた命を失うのを見ると、ナポレオンを崇拜していた自分を恥じ、みずから戦場に立つて、戦傷をうけた。アナトールはこの戦いで戦死した。アンドレイも重傷を負つた。

クツゾフ將軍はモスコを焦土と化してナポレオンに引き渡す作戦をたてた。市民の撤退ははじまり、ロストフ家のもも家財を車につんで、モスコを去つた。ビエールはしかし、ひそかにモスコにのこつて、世界を破壊にみちびく狂人を射とめようとはかつた。ナポレオンはモスコに入城して寒さを防ぐ家もなく、食糧もないことを知つた。機会をうかがつていたビエールはやつとナポレオンに近づいて、射殺しようとしたが、相手がナポレオンであらうと誰であらうと、殺人を行う気になれなかつた。自暴自棄になつて街をさまよい、フランス軍に捕えられて、牢獄にいれた。

ロストフ家の人々はモスコの東方の僧院に難をさきた。重傷のアンドレイも一しよだつた。アンドレイはやつと人間の弱さをとり、すべての憎しみの心を捨て去り、ナターシャに抱かれて、安らかに死んでいった。ニコラスはアンドレイの子供をひきとつていたマリアと僧院にやつてきた。ソニヤは恋をあきらめて、ニコラスをマリアにゆづつた。

ビエールは牢獄でおなじように捕われていた農民のプラトン（ジョン・ミルス）と知りあつた。プラトンは信仰があつて、いずれは死刑となら身でありながら、すこしも苦しんでいない様子があつた。

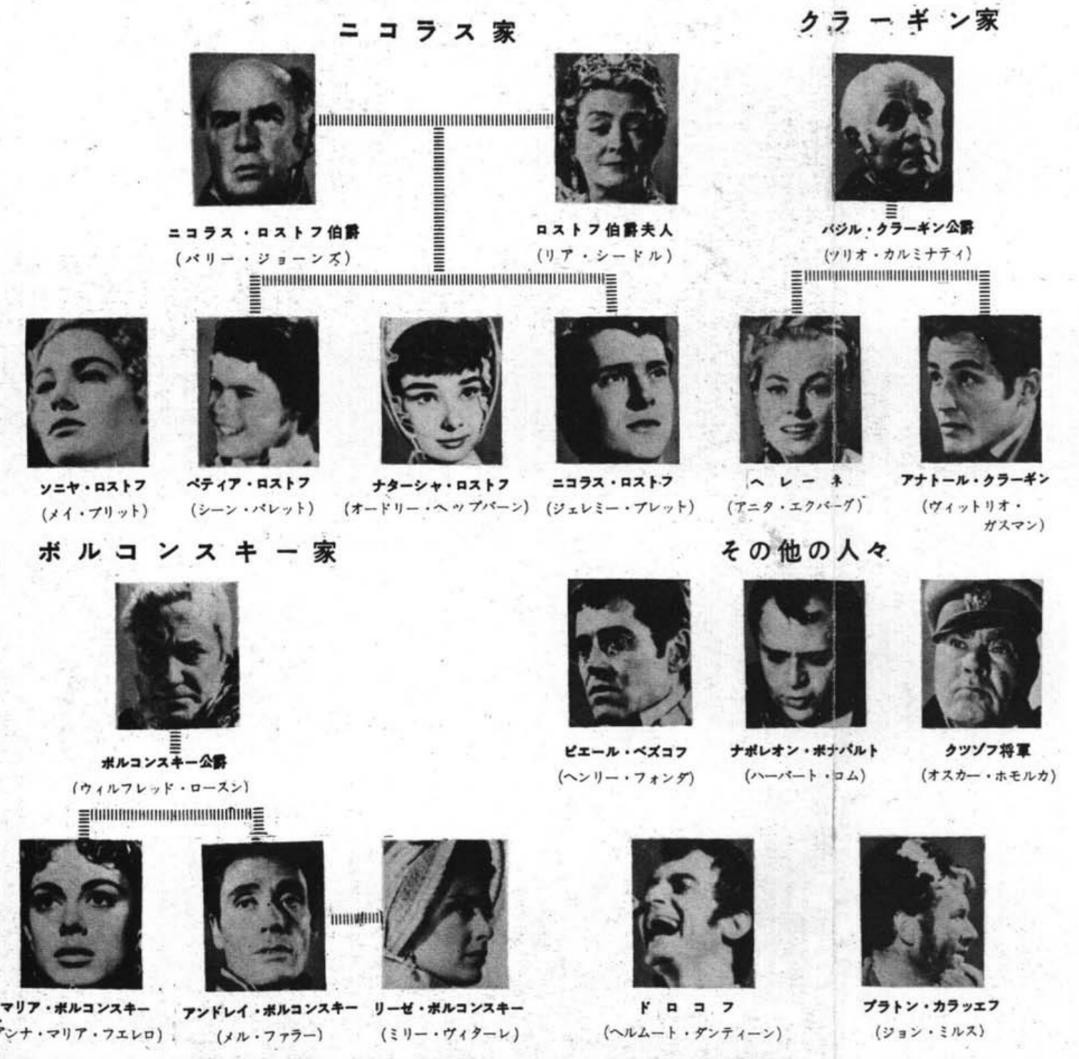
ナポレオンはついにモスコを撤退、ニーマン河まで引きかえす決心をした。十月のある日、フランス軍はあわれな姿で西にもどりはじめた。捕虜も一しよにつれて行かれて、疲労して歩けなくなつたものは容赦なく射殺された。プラトンもその一人だつた。

ドロコフの率いたコサック騎兵がフランス軍をおそつて、何名かの捕虜をとりもどした。ビエールも運よく、そのときに救われた。

十一月の末、クツゾフ將軍は大軍をもつてフランス軍をおそい、土気のおとろえた敵軍をベレジナ河へ追いこんだ。ナポレオンは部下を見すて、パリへ逃げかへつた。

ビエールがモスコにもどると、焦土と化した街に復興の希望がもえはじめていた。いまは荒廃して見るかげもないロストフ邸で、おとなになつたナターシャが彼を待っていた。ビエールがナターシャにもたらしたものは、経験とプラトンが彼に教えた人生の真実だつた。

「戦争と平和」の登場人物



戦争と平和

WAR
AND
PEACE

パラマウント超巨篇 ビスタビジョン総天然色

8p # 23659

LEO TOLSTOY'S War and Peace



THE CAST

Natasha	AUDREY HEPBURN
Pierre	HENRY FONDA
Andrey	MEL FERRER
Anatole (brother of Helene)	VITTORIO GASSMAN
Helene	ANITA EKBERG
General Kutuzov	OSCAR HOMOLKA
Napoleon	HERBERT LOM
Platon	JOHN MILLS
Dolokhov	HELMUT DANTINE
Lise (wife of Andrey)	MILLY VITALE
Count Rostov (Natasha's father)	BARRY JONES
Prince Bolkonsky (Andrey's father)	WILFRED LAWSON
Countess Rostov (Natasha's mother)	LEA SEIDL
Nicholas Rostov (Natasha's brother)	JEREMY BRETT
Petya Rostov (Natasha's brother)	SEAN BARRETT
Mary Bolkonsky (Andrey's sister)	ANNA MARIA FERRERO
Sonya	MAY BRITT
Kuragine (father of Helene)	TULLIO CARMINATI
Denisov	PATRICK CREAN
Peronskava	GERTRUDE FLYNN

CREDITS

Produced by	Dino De Laurentiis
Directed by	King Vidor
Based on the novel "War and Peace" by	Leo Tolstoy
Adaptation	Bridget Boland, Robert Westerby, King Vidor, Mario Camerini, Ennio De Concini, Ivo Perilli
Director of Photography	Jack Cardiff
Director of Photography, Second Unit	Aldo Tonti (A.I.C.)
Color by	Technicolor
Art Director	Mario Chiari
Associate Art Director	Franz Bachelin
Assistant Art Director	Gianni Polidori
Costumes	Maria De Matteis
Set Decoration	Piero Gherardi
General Production Manager	Bruno Todini
Production Assistant New York	Ralph Serpe
Supervising Editor	Stuart Gilmore
Editor	Leo Catozzo
Sound Editor	Leslie Hodgson
Sound Recording	Charles Knott
Dialogue Coach	Guy Thomajan
Production Assistant to Mr. Vidor	Arthur Fellows
Assistant Directors	Piero Musetta, Guidarino Guidi
Makeup Supervision	Alberto De Rossi
Antiques for set decoration supplied by	Vangelisti—Lucca, Tuena—Rome
Music Score by	Nino Rota, Directed by Franco Ferrara
	Western Electric Recording

THE STORY

HAVING brought most of the rest of Europe to its knees, the invincible Napoleon Bonaparte has at last turned his attention to Russia. In Moscow, a young liberal named Pierre Bezukhov (Henry Fonda) pays a visit to the household of his good friend Count Rostov (Barry Jones) and the Countess (Lea Seidl). The Rostovs are readying their elder son Nicholas (Jeremy Brett) to depart with the troops.

But the member of the family dearest to Pierre's heart is its vivacious thirteen-year-old daughter Natasha (Audrey Hepburn). After watching the departure of the troops with her, he goes to

a drunken farewell carouse being given by the dissolute army officer Dolokhov (Helmut Dantine). Illegitimate son of the Czar's trusted adviser, Count Bezukhov, Pierre has made undesirable acquaintances because of the equivocal position he occupies unless his father will acknowledge him. His drunken spree is broken in on when his closest, truest friend, moody young Prince Andrey Bolkonsky (Mel Ferrer), arrives to tell Pierre that the old Count is dying and has asked to see him.

On his deathbed, the elder Bezukhov at last acknowledges Pierre as his heir. The estate the young man has inherited is great enough to spark the interest of old Prince Vassily Kuragine (Tullio Carminati) and his beautiful daughter Helene (Anita Ekberg), and Helene sets out to lure the dazzled Pierre into marriage. Meanwhile, Andrey—bored with society and his shy little wife Lise, (Milly Vitale)—is preparing to go to the front on the staff of General Kutuzov (Oscar Homolka), friend of his father, stern old Prince Bolkonsky (Wilfred Lawson).

Andrey goes off to join Kutuzov and on the disastrous battle field of Austerlitz, he briefly rallies a routed Russian company, falling with the flag in his grasp, being left for dead. His wounds, however, are not fatal and he returns to the Bolkonsky estate to find his terrified Lise dying in childbirth. Self-reproach and his new disillusionment with military glory combine to make a recluse of him.

During these same months, Pierre's marriage to Helene has not proven a happy one. The bride has made herself so publicly conspicuous with the immoral Dolokhov that Pierre is compelled to challenge his former friend to a duel; and, although he is no match for the older man, he wounds Helene's lover with a lucky shot. Naturally, he considers his marriage over.

Summer comes to Russia once more, and Pierre introduces his brooding friend Andrey to Natasha. Despite her youth, Andrey falls completely in love with her and tells her so at a court ball. But old Prince Bolkonsky insists his son must go away for a year before he will consent to their marriage. Romantic and inexperienced, Natasha soon falls prey to the passionate suit of unprincipled Anatole Kuragine (Vittorio Gassman). Too late, Natasha discovers that Anatole has a wife and that she had betrayed Andrey's faith in her for nothing.

Pierre, belatedly aware that his fondness for Natasha has ripened into love, goes back to his country estate. It is now the scene of war, where Napoleon is engaging the Russian forces—Andrey among them—in the Battle of Borodino. An eyewitness to the horror and ruthlessness of war, Pierre no longer entertains the admiration for Bonaparte (Herbert Lom) that sustained his younger theorizing. The wily General Kutuzov withdraws to allow Napoleon to over-extend himself by marching on to Moscow. The Russian plan is to burn everything in the enemy's path and leave them at last far from home in an empty city without supplies or resources.

Among the terrified thousands who flee the undefended city, as the French draw near, is the Rostov family. But Pierre has remained behind in the doomed city, intending to assassinate the glory-mad Napoleon for humanity's sake.

At the last moment, however, he finds himself unable to kill any man in cold blood. He is captured by the French and flung into prison, where he encounters a peasant philosopher named Platon (John Mills) whose commonsense view of life does much to mature Pierre's own thinking.

Ignorant of Pierre's fate, the Rostovs have taken refuge in a monastery far east of Moscow. Here, Andrey is brought dying of new battle wounds. He and Natasha are reconciled before his death, and he leaves his small son in her care.

As winter closes in and supplies are unobtainable, Napoleon realizes he must fall back from Moscow or starve. Among the prisoners forced to accompany his retreating army are Pierre and Platon. Platon dies, along with many others, during their grim march. But Pierre lives to be freed by a riding troop of Cossacks, although he sees Natasha's younger brother Petya (Sean Barrett) fall in the encounter. He learns from Dolokhov, his former enemy and now his rescuer, that his wife, Helene, has died.

The French meet final defeat at the Battle of Berezina. With the return of peace, soldiers and civilians alike make their ways back to their former homes. Among them is Pierre, who finds a maturer and wiser Natasha. They know now that the future will be shared by them together.